

古代史に遊ぶ

第 32 回 -藤ノ木古墳を訪ねて その2-

藤の木古墳で注目を浴びた金銅製の副葬品(冠、大帯、杵など)は、この時代の最先端の流行品であろう。その中でも藤の木古墳の出土品は最も絢爛豪華で、被葬者の身分の高さを示している。同様のものが西は佐賀県から東は群馬県まで散在する13箇所の古墳で出土しているが、これらの古墳のほとんどが前方後円墳で、その被葬者はそれぞれの地域の有力首長層とみられる。また、藤の木古墳と同じような、比較的小規模な円墳から出土している例もある。このうち継体を支えた滋賀・湖西の三尾氏の首長を埋葬した鴨稻荷山古墳へは訪れたことがあり、出土品のレプリカを近くの高島町資料館で見学した。その他の古墳では兵庫・奈良・京都・静岡など近場にあるものは機会を見て訪れたいと思っている。

藤の木古墳の築造年代は、須恵器や馬具類の年代、家型石棺の形式、横穴式石室の形態から570～580年と狭い範囲に絞られているが、上に述べた同種副葬品の出土した古墳の築造の時期は5世紀後半から6世紀わたっている。前方後円墳は九州をのぞく東海以西のほとんどでは6世紀後半頃ほとんど姿を消し、方墳・円墳へと変わって行った。7世紀初めごろには東国各地でほぼ一斉に前方後円墳は終息している。これは350年間続いた前方後円墳を媒介とする政治秩序を廃棄し、新しい国家体制を構築するための出発点としようとする中央政権による政治意志によるものであったと云われている。

藤の木古墳の被葬者は欽明天皇(29代)の皇子という説がもっとも有力であるので、ここで、欽明即位に至る皇統譜を追ってみよう。まず、5世紀後半に登場する21代雄略(武)のときに大王家は連合政権を構成する有力豪族からぬきんでた「治天下大王」の地位を確立し、大和政権として地方諸国の上に君臨、首長(国造)を支配する体制となった。ところが、雄略の没後、後継者の白髪皇子(清寧)が即位後短時日で亡くなり、王統断絶

の危機を迎えた。そこで雄略の父允恭(済)の兄である履中(讃)の孫、顕宗・仁賢が相次いで即位している。この兄弟は父の市辺押磐皇子を皇位継承のライバルであった雄略に殺された後、播磨の縮見屯倉に隠れていたところを、偶然発見され朝廷に迎えられた。即位後、弟・顕宗は父の墓を造ろうとして、行方不明の骨を探したところ、その所在を知っているという近江の賤しい老嫗を見つけることができた。なぜ遺骨と判るのか、押磐は表音文字として忍歯とも書き、父王は八重歯に特徴があったらしい。歯を決め手とし判定し、亡くなった蚊屋野に御陵を造り葬った。御陵は現存し宮内庁により管理されている。

この二王の没後即位したのは、兄・仁賢と清寧の妹春日大郎娘との間に生まれた武烈であったが、この武烈にも子がなく、武烈没後再び王統断絶のより深刻な事態に見舞われた。そこに応神五世の孫・継体天皇(26代)が登場する。大連の伴金村、物部麁鹿火、大臣の許勢男人らに推戴され、河内の樟葉宮で即位し、即位の第5年、宮を山背の筒城に移し、12年には更に弟国に遷した。その間、大和諸豪族の対立勢力とどのような関係・争いがあったかについては諸説がある。このあたりは想像をたくましくする余地が多分にあり、「古代史に遊ぶ」には好適な題材である。注目すべきは、継体の支持勢力は日本海から瀬戸内海へと通ずる交通、即ち越から琵琶湖をへて宇治川・木津川・淀川、そして河内湖と連なる水陸運の要衝に分布していた。またその勢力は尾張・美濃・山背・丹波・河内などを押さえて、地域における物流・経済活動を彼らが効果的に支配していたとみられる。従って、継体は対立勢力の反対で大和の中心に宮を設けることができなかったのではなく、自ら好んでより経済活動の効率の高い木津川、淀川流域に本拠を置いて勢力を養っていたと見ることができる。宮都を磐余玉



●藤ノ木古墳



●藤ノ木 4 家形 解説

穗宮に定めたのは即位20年後であると日本書紀にある、これには初代のイワレヒコ（神武）に因み、第二のイワレヒコになることを期して磐余を選んだと解釈をする説もある。

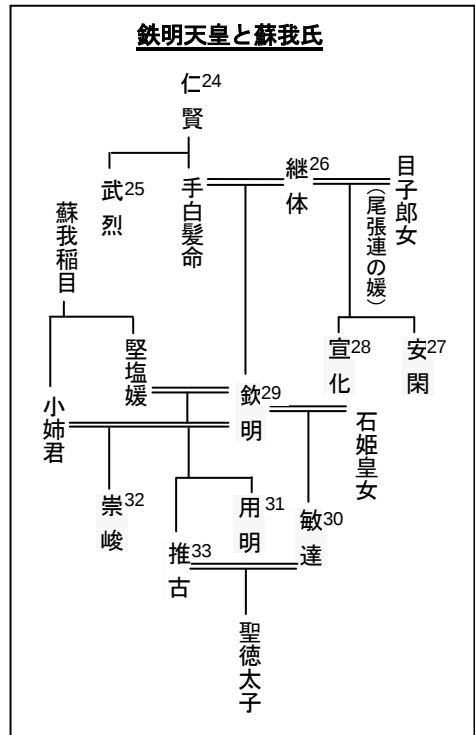
継体の没後、尾張氏からでた日子媛を母とする安閑・宣化両天皇がまず即位し、次に仁賢天皇のむすめ手白髪皇女を母とする欽明天皇が540年に即位した。しかし、この間に皇位継承を巡る争いがあったのではないかという見方もある。地方勢力と中央の対立は深刻となり、大和朝廷は大いに動揺したが、この間に屯倉の拡充で地方勢力にくさびを入れ、また官司制（官吏の任命）などの重要な政治機構の再編・変革が行なわれた。

もう一つの要因は国際関係、特に朝鮮半島の情勢の悪化である。百済が北方の高句麗に圧迫されて、南に下がって倭の権益領域を侵し始め、新羅も徐々に国力を蓄えて、国の体制を整えるとともに実力を養って来た。この半島における退勢を挽回する軍を起こそうとしたとき、挑戦の基地である北九州で大きな内乱・磐井の乱が勃発した。朝廷は総力を挙げ将軍・物部鹿鹿火に斧鉞を授けて、筑紫に派遣し乱を鎮圧したが、多年に亘る朝鮮経営の失敗により大伴金村は失脚し、政治の中心は蘇我稲目と物部尾興が司ることとなる。

蘇我稲目は欽明天皇に二人の娘をいれ、姉・堅塩媛の腹に生まれたのが用明天皇と推古天皇、妹・小姉君の生んだのが崇峻天皇と次々と皇位を占めた。政治機構の中心を握った稲目を中心とする蘇我氏が欽明朝以後の宮廷で格段の勢力を持つにいたったことが明らかである。さて、ようやく藤の木古墳の有力な被葬者候補とされる欽明の皇子たちに到達することができたが、なんと欽明は25人もの子福者であり、被葬者を割出すのは容易ではない。宗教上の理由から天皇家は墓誌を作らなかったため、被葬者の決定は常に困難な問題である。

欽明朝といえば仏教の伝来、これを受容するかどうかは続く敏達・用明朝の重要問題であり、蘇我氏と物部氏はその可否を巡って争いを繰り返し、結局、反対派の物部守屋は有力氏族を糾合した賛成派の蘇我馬子によって滅ぼされる。その翌年、小姉君の子、泊瀬部皇子が崇峻天皇として即位するが実権はなく、馬子を憎んでいることを知られて、馬子の配下・東漢直駒によって殺されてしまう。法隆寺の古文書に「藤の木古墳は崇峻陵」と記されているということであるが、これは

疑問とされている。その後、有力な皇位継承候補の厩戸皇子と竹田皇子の間の調整がつかず、中継ぎとして敏達の皇后であった炊屋姫が推古女帝として即位した。この天皇家の歴史における初めての女帝は36年間ものあいだ位にあり、その間に皇太子や皇太子の候補者は皆さきに死んでしまったのである。



このように述べたことを背景として、新説を含めて藤の木古墳の被葬者・欽明天皇の皇子とは誰が候補なのだろうかなどと、考え遊んでみるのは大いなる楽しみである。藤の木古墳は法隆寺が建立（607）される以前に、水陸交通の要衝の場所に斑鳩地域の開発にさきだって築造されていた。この当時の宮は磯城・磐余の地であって、大和川（初瀬川）に沿った海石榴市に港があり、外港である難波津と結ばれていた。斑鳩は難波津と海石榴市を結ぶ水運の中継点であり、陸路においても竜田山を越えて、上町台地の先端部の難波津へ至るルートの中継点に当たっている。また藤の木古墳の横穴式石室の方位が磯城・磐余に向けて造られているというのも注目すべき点である。

（岡野 実）

文献1）藤の木古墳を巡る課題 京都新聞創刊110年記念国際シンポジウム 第2部

基調講演 （1989. 11. 4/5）

2）日本の歴史 古代国家の成立 直木孝次郎 中公文庫（1986）